

「神と和解できたらいいな」

岡山の実家へ帰りますと、そこはかなりの田舎なわけですが、道沿いの倉庫や民家の壁に、よく例の看板が掲げてあります。例の看板と言うのは、黒い下地に白や黄色の文字で目立つように書かれた「死後さばきにあう」とか「キリストが人をさばく日は近い」とかいう看板です。敦賀ではあまり見かけないかな、と言うのが私の体感ですが、皆様もそういう看板を見たことがあるでしょうか。調べてみますと、これは「聖書配付協力会」という団体による宣教活動だそうです。宗教法人ではなく、一般社団法人として登記されていて、位置づけとしてプロテスタント系超教派によるボランティア団体とのこと。看板の設置の他にも、冊子の配布や街宣車による広報活動もしているそうです。正直、私たちが志す宣教方針とは相容れない部分もありますが、まあ、そういう活動をしている人がいるということは、少なくとも理解者があり、賛同者があるということなので、やり方は違うけど、お互い頑張りましょう、ただあまり怖いことは書かないでね、といったところですね。

中国自動車道という私の実家の近くを通る高速道路を走っていたら、民家の壁に貼られた看板とは比べ物ならないくらい大きな看板を見かけました。土手伝いに高さ 2 メートル、幅 20 メートルくらいでしょうか、「キリストの血は罪を清める。死後さばきにあう」と特大サイズで書かれていて、珍百景を見たような気分になりました。

真面目に考えるなら、「死後さばきにあう」という言葉は正しいです。イエス様は、いずれ再臨されて「生ける者と死ねる者とを裁きたまわん」というわけですので。ただ、さらに正確に言うなら、「死後さばきにあう」人もいれば、イエス様再臨の際に存命なら、生きながら裁きにあう、ということもあり得ます。また、「キリストの血は罪を清める」という言葉は、これは時間設定が誤って

います。正しくは「キリストの血は罪を清めた」と言うべきですね。過去形にしないとイケない。今から 2000 年前に罪の清めはイエス様の十字架によって完結していると考えるのが正しいでしょう。

色々な信仰理解、イエス様の称え方、十字架の捉え方があって良いと私は考えていますが、でも、一つ納得できないのは、多くの厳しい信仰理解では、救いや赦しは未来の出来事であり、我々は頑張っ、苦しんで、その救いと赦しを勝ち取らねばならないのだ、という考えです。これは個人的には承服できない。イエス様が最初で最後の全きいけにえとして死なれたのに、それでもまだ足りないと言わんばかりに、信仰者の犠牲と苦難を求めて、圧力を掛けるような信仰理解は、やっぱり良くないですよ。これは個人的な考えですが、救いや赦しのために、あれをしましょう、これをしましょうと言うのは、イエス様の十字架を不当に過小評価しているのだと思っています。神様の子であるイエス様の死って、そんなに軽いものだったのでしょうか。

私は、イエス様の死、主の十字架を、これ以上ない救済の出来事として高く見積もり、私達が足し加えるべき何ら犠牲も苦勞もないと考えます。その代わり、その尊く掛け替えのない御業のゆえに、感謝と恩返しを続けていきたいと思ひます。「これをしないと救われないよ、赦されないよ、頑張りなよ」ではなくて、「もう救われているんだって良かったね、赦されて今日も一緒に過ごしている、この気持ちをどう伝えようか」と、隣人を包み込む言葉と行動が選べたら良いですよ。

ユダヤ教に遡る、古代の信仰理解では「救いや赦し」を得るための犠牲の捧げ物がありました。人間は頑張っ、神様からお墨付きを得ないといけな時代も確かにあったんですね。しかし、今は「古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」と 17 節に書いてある通りです。「これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通して私達を御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務を私達にお授けになりました。つまり、神はキリストによって世を御自分と和解さ

せ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです」。ここには、かなり重要なことが言われていまして、和解という良き報せは、人間から出るものではなく、つまり、人間の判断で赦す・赦さないが決まるわけではなく、すべて神様から出るものである、ということ。また、「人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちに委ねられた」。もし、そうだとすれば、私たちが語るべき言葉が、どんなものかなは、自ずと分かるはずです。罪の責任を問うことの無い和解の言葉ですから、それが人を責め立てて恥と罪を問い詰めるような言葉にはならないことは明らかですね。その理解から、私たちも語るべき言葉を選んでみたいと思います。

21 節の御言葉も決定的な意味を持っています。「罪とは何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちは、その方によって神の義を得ることができたのです」。

「神の義」とは、一番分かり易く言うと、「神様との良い関係」ということです。私たちは、イエス様の贖罪の十字架によって、「神様との良い関係を得ることができた」のだと。「得ることができようだろう」とか「得ることができようでしょう」とか、そういう不確かな未来を説いているのではなくて、「得ることができた」と言われている辺り、私たちは安心したら良いのだと思います。ちなみに、「和解させていただきなさい」という命令について触れますと、これは、すでに確定している和解を、素直に受け取りなさい、ということです。差し出された和解の握手を、恥ずかしがらず、遠慮せずに握り返す、という感じでしょうか。

今回の説教題にした「神と和解できたらいいな」とは、例の看板への当てつけという意図もあったりしたわけですが、実際のところ「神と和解せよ」も「神と和解できたらいいな」も見当違いなんですよね。本当は「神様と和解できてるよ、もう良い関係だよ」ってことです。その信仰者の立場から、赦され良しとされている自分の言葉と行動で、少しでもこの世界に福音を届けることができれば、素敵ですね。今日から始まる 1 週間も、キリストと結ばれて新しく創造された者、つまり、

神様との良い関係にして頂いた者として歩んで参りましょう。そして、そんな私たちの後姿が、自由と喜びを醸し出すものとなりますように。最後にお祈りを致します。

神様。

今日も私たちをこの礼拝に招いてくださり、感謝致します。あなたは、私たちのために御子イエス・キリストをお与えになり、私たちの人生の支えとしてくださいました。失敗や過ちから逃れられない私達ですが、主の十字架とあなたの愛に信頼を置き、それでも尚、幸いを求めて生きてゆくことができますように。自分が赦されていることを知って、隣り合う人たちへ優しさと寛容を示すことができますように。どうか導いてください。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。